

# 水田・里山放牧ニュースレター

第26号

2013年12月10日

発行 水田・里山放牧推進協議会  
事務局 畜産草地研究所(那須研究拠点)  
〒329-2793 那須塩原市千本松768  
TEL 0287-37-7003 FAX 0287-37-7132



平成25年10月31日、畜産草地研究所那須研究拠点において平成25年度水田・里山放牧推進協議会情報交換会が開催されました。参加者は、農家、農協、大学、国、自治体職員などで、全国から76名が参加しました。

飼料自給率向上に向けて、増大する耕作放棄地は飼料生産の場として有効活用すべき対象であり、また、乳牛、肉用牛の生産現場では労働者不足、担い手の高齢化により労力軽減への期待がきわめて高くなっています。そのため放牧の活用は不可欠であり、自給飼料増産に向けて、その拡大が求められています。

また本年度は当協議会の設立10周年に当たります。そこで、全国の放牧技術普及関係者等に最新の関連技術を発表いただくとともに、各地域での生産者、行政および研究者による取り組み事例等の情報交換を行いました。その概要をご報告します。

## I. 基調講演

「放牧を活用した農村再生の道」と題して、ジャーナリストの吉田光宏氏が講演いただきました。

日本の農業や地域社会が少子高齢化や農業の衰退にあえぐだけでなく、低い食料自給率や環太平洋連携協定(TPP)のような自由貿易拡大への潮流など不安材料も多くなっています。こうした厳しい時代に、牛の放牧が救世主になってくれるのではないかと、そんな期待を抱きながら山口、広島両県を中心に小規模移動放牧の歴史や現状、将来への展望を紹介されました。

①新しい時代の放牧として、山口県で実施した水田放牧事業と移動放牧事業の二本柱による新しい放牧スタイルが耕作放棄地解消や畜産振興などに効果があるとして普及してきました。

②よろず効果と現代的な意味として、農業側からは、畜産の振興、耕作放棄地の解消、獣害防止および経営の安定化が、人間の側としては、地域社会の活性化や癒しが、国土と国民を守る視点からは、食料安全保障が、環境の視点からは、環境保全や生物多様性の維持が挙げられました。

③「小規模移動放牧」、「水田・里山放牧」などとして全国で普及している小規模放牧は、その原型が山口県で造られ、育まれた「山口型放牧」ということができます。

④農林水産省は「不測時の食料安全保障マニュアル」を2002年に作成し、以後一部改定しています。そこでは終戦後の食糧難時代を上回る惨状の



基調講演する吉田光宏氏

可能性を突きつけています。遷移によって田畑が森林になるのを防ぎ、農地を守らなくてはなりません。放牧で農地を「潜在的な自給基盤」として維持できれば、いざという時に穀物などの生産が再開できます。

## II. 話題提供

### 1. 水田・里山放牧推進協議会 10 周年に想う

まず、神津牧場の常務理事で本協議会の初代会長である清水矩宏氏から、話題提供を受けました。

①協議会設立前後の情勢:畜産草地研究所では、現地実証プロジェクトとして中村牧場において放牧導入と技術改善に取り組み、経営および研究上かなりの成果をあげてきていました。また、平成 13 年に放牧技術の現地検討会を開催したところ、農家の関心が高く近辺から 20 名近くの農家が参加しました。

②協議会設立では、点から面へを目指して、平成 15 年に本会の設立総会と第1回情報交換会を開催しました。その当時の那須近辺の実施農家等は、およそ 10 農家でした。また、放牧導入に当たっての不安としては、脱柵、牛の捕獲や移動、何頭ぐらい飼えるか、草地の造成管理法は、近隣から苦情は来ないか、などが挙げられていました。

③推進内容として、情報の交換、マニュアルの作成、普及のための体制作り、技術開発の推進などがありました。

④畜産草地研究所への期待としては、現地実証プロジェクト、高度化事業、ブランド日本、経常研究などでの研究、普及のための技術指導体制の構築、事務局体制などについて要望がありました。

⑤水田・里山放牧ニュースでは、情報交換会や現地視察について紹介してきました。

### 2. 放牧普及をめぐる情勢

つぎに、農林水産省畜産振興課草地整備推進室の丹菊将貴氏から、話題提供を受けました。

①最近の放牧の取り組みとして、全国の取り組み事例が紹介されました。

②放牧の取り組みの効果等については、飼養管理、飼料生産の省力化、購入飼料費の削減、繁殖成績の向上、鳥獣害の軽減、耕作放棄地の解消等が挙げられました。放牧の拡大に際しての課題としては、指導者の育成、まとまった土地の確保、周辺住民の理解、放牧生産物の品質向上や安定生産などが挙げられました。

③放牧の取り組みの具体的内容として、足寄町、山口市、松江市の例が紹介されました。

### 3. 最近の放牧研究

さらに、畜産草地研究所、草地管理研究領域の井出保行氏から、最近の放牧研究と題して、話題提供を受けました。

①農山漁村の豊かな資源を活用し、地域の活力向上と強い日本農業の確率を目指す攻めの農林水産業が、農政の重要な柱として推進されています。施策の具体化に際しては、184 の先進事例(現場の宝)を検証することで3つの戦略方向を設定し9つの課題に整理されています。そして、現場の宝の一つとして、山口型放牧が取り上げられたことは特筆に値します。

②水田・里山放牧の拡大と課題としては、個人としては扱いきれなかった土地の集積、近隣農家との合意形成など、行政機関の支援に加え、個人的取り組みを地域営農システム的な取り組みに拡大する必要があります。

③水田・里山放牧の拡大と公共牧場の関係では、後者が持つ技術的蓄積は指導・普及機関としての役割を果たす貴重な財産になります。

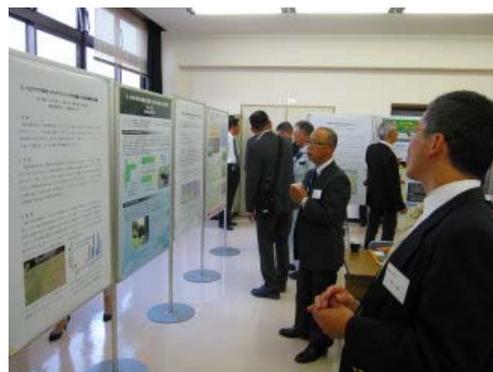
④畜産草地研究所では公共牧場の活性化に向けて、「利用者ニーズに応じた家畜生産技術の高度

化」に加え、「立地や利用条件に応じた効率的な牧場運営技術の開発」を進めています。

### Ⅲ. ポスター発表

全国から集められた放牧に関連した研究成果 25 題についてポスター発表が行われ、活発な討論が行われました。

- 1) ブラウンスイス種の放牧飼養における特性調査(真崎 匡他)
- 2) 小規模放牧における衛生実態とマダニの動態(寺田 裕)
- 3) シバの糞上移植によるシバ草地造成(北川美弥他)
- 4) 関東平野部における暖地型牧草バヒアグラスの利用(北川美弥他)
- 5) バヒアグラス草地へのイタリアンライグラス追播による放牧期間の延長(北川美弥他)
- 6) 本州中部の落葉広葉樹二次林を活用した夏季放牧(井出保行)
- 7) 排卵同期化と早期妊娠診断を組み合わせた繁殖プログラムによる繁殖管理(後藤裕司他)
- 8) 防草シート導入電気柵におけるシカ進入防止効果(塚田英晴他)
- 9) 放牧地の牧養力予測のための支援プログラム(堤 道生他)
- 10) 放牧を利用した肥育素牛生産(木戸恭子他)
- 11) 地形を考慮したシバ型草地の早期造成(平野 清他)
- 12) 少量施肥によるシバ型草地の生産性(平野 清他)
- 13) 放牧牛の行動情報を収集できる簡易GPS首輪の作成(渡辺也恭他)
- 14) 無線傾斜地トラクタを利用した傾斜草地の除染(梅村恭子他)
- 15) 周年放牧肥育向け草地管理体系の提案(金子 真他)
- 16) 水田放牧に対する地元地権者の評価と意向(恒川磯雄)
- 17) 兼業耕種農家が主体となった肉用牛放牧で地域の農地を有効活用(保倉克己他)
- 18) クマイザサ草地併用で黒毛和種牛を親子放牧した際における仔牛日増体量の経年変化(小路 敦)
- 19) 寒地型牧草地へのイタリアンライグラス簡易導入の可能性の検討(速報)(小路 敦)
- 20) 小規模移動放牧による肥育素牛の放牧育成(手島茂樹)
- 21) 播種によるシバ型草地の早期造成(山本嘉人他)
- 22) 耐湿性1年生牧草による水田放牧草地の生産量(山本嘉人他)
- 23) 放牧牛貸し出します(帯刀一美他)
- 24) 車に乗せて、放牧地へ牛を連れて行こう(深澤 充他)
- 25) 太陽光発電でウシの飲み水を供給(中尾誠司)



ポスター発表風景

### Ⅳ. 事例報告

#### 1. 水田地帯での放牧酪農経営

水田地帯の放牧酪農経営について、茨城県の上野 裕氏から事例報告を受けました。上野牧場は、利根川流域の湿地帯にあり、数軒の農家と共に協同で入植し、酪農を営んできました。2007年に放牧酪農体系に挑戦し、本年で7年目になります。搾乳牛は35頭で、平均乳量は5700リットルです。他に育成牛と子牛が20頭います。放牧地は4.7haで、採草地5haは借地です。

放牧は、搾乳牛を1群で9牧区を1日ごとの転牧です。ただ、放牧地全体の面積が放牧牛に対して不足することや、まだ各牧区に水飲み器が配置されていないことから、春季と秋季は昼間のみ、夏季は夜間のみを半日放牧を行っています。放牧を始めてから、放牧している間の牛舎内作業が軽減されると共に、購入飼料量も少なくなっています。

今回の講演は、今秋に行われた世界農業ドリームプランで「乳と蜜の流れる地プロジェクト」と題して発表され、感動大賞に選出されたものを再演していただきました。

## 2. 遊休地を活用した肉用牛繁殖経営への新規参入

栃木県の肉用牛繁殖農家である瀬尾 亮氏から上記題名で講演をいただきました。瀬尾さんは、平成14年に海上自衛隊を退職し、奥様の実家に戻りました。シイタケの露地栽培では展望が見えなかったため、和牛の繁殖経営に踏み切りました。現在は、繁殖和牛20頭と子牛15頭を飼養しており、放牧への比重を高めてきました。

放牧は家の前の休耕田から始め、次第に休耕田の借地を増やしてきました。その過程では、地権者とのいろいろなトラブルもありました。また、電気牧柵を有効に利用しました。

将来は、山を有効に使い魅力あるものにしていきたいと考えています。また、要望事項としては、休耕田の斡旋については、行政が中心となって強力で進めて欲しいと思います。



事例報告する上野 裕氏



事例報告する瀬尾 亮氏

## V. 総合討論

山本嘉人草地管理研究領域長の司会で、総合討論が行われました。話題の中心となったのは、休耕田の貸借関係で、行政が主体となって調整してほしいという意見が聞かれました。

また、山本氏からは本会の今後の方針として、放牧を活用しながら幅広く畜産経営全体を考える「放牧活用型畜産」と題した情報交換会に発展させたいという提案があり、了承されました。

これまでのニュースレターは水田里山放牧推進協議会のホームページ(<http://houboku.ac.affrc.go.jp/>)に掲載されています。

メールでの情報交換も可能ですので、質問・要望等ございましたら、以下にお寄せ下さい。

〒 329-2793

栃木県那須塩原市千本松768 畜産草地研究所那須研究拠点連絡調整チーム

FAX:0287-37-7132 e-mail : [kouryu\\_nasu@naro.affrc.go.jp](mailto:kouryu_nasu@naro.affrc.go.jp)